

# 日本的空間の生成と構成 一「間」の文脈一

建設工学専攻（修士課程）  
建築設計研究

510041 河野 俊次  
指導教員：堀越 英嗣 教授

## 序章 . 本研究に関して

### □研究背景

建築における「日本的な空間」とは何であろうか。生産される建築に対して様々な批評が与えられる中、幾度となく「日本的である」という表現を目にすることがある。もちろんはあるが、それは一義的に定義できるものではないだろう。しかしその評価体系はあまりにも曖昧模糊としていて、建築界の中に潜み、ある一定の象徴的価値をもって「日本的」は語られている。

更に「日本的」に対する多面的解釈は現代においても屢々常数的に増殖し、その源流を辿ることは難しい。その理由としては技術的進化に伴うデザイン言語の多様化が挙げられる。また情報化社会の恩恵としてCADやBIMが台頭し、設計者の思考ツールとして定着しつつあり、表現者の意識下でも新たな空間の創造が可能となった。このような現状で「日本的」という言語をデザイン言語へと昇華させるには今一度の再解釈が必要ではないだろうか。

### □研究目的 / 方法

「日本的」と称される概念のうち「間」に焦点を当て、その成立背景から空間へと研究を進める。「間」は物質的な側面と概念的な側面を両方持つため、日本的な概念の中では解釈が困難である。これまで数多くの文献で日本人の持つ空間認識が、言語学や文化人類学と結びつけられ語られてきたが、実質的な空間との結び付きや評価体系としてはいまだ未熟ではないだろうか。それ故に「間」はそのままに「日本的」であり、西欧文化にはないものとして捉えられる。「間」という言語の定義を日本人の深層にある特質より抽出していく、西欧文化との差異を見出し、そして空間へと接続していくことが更なる「間」、延いては日本的なものの展望を開くことになるだろう。家の壁ではなく敷地全体にある境界意識、主体性の排除された空間、薄い平面の重層と中間領域の存在、今まで語ってきた日本的な特質を再び焦点を当て、その構成要素を明らかなものにしていくことを目指す。

### □本論の構成

1章では日本人の特徴としてその言語学的・社会的・文化的な背景を通して考察を重ね、日本人の空間認識へと繋げる。2章では1章の内容を受け、発達していったと見られる日本的な空間について記述する。また日本的なものが空間から背景へ接続可能なものとして、1章で背景としたものが全て空間の創り方から説明可能であることを示す。（=つまり背景ではなかったという図と地の転換）という論立てを持って進め、「間」の生成に関する源流を両側面から明らかにしていきたいと思う。3章では1.2章で述べた論を展開し、オランダ（諸外国の一例として）との比較や反復と差異の中に見出される「間」について考察を深めることで、より日本的なものを明確なものにしていきたい。そして最後に総論としてこれまでの文脈を踏まえ、「間」のコードとして図化によるアウトプット等を行い本研究の結びとする。

## 1章 . 日本的空間の成立背景

この章では日本の特徴的な空間を記述するための日本人の持つ背景を述べる。言語、社会、文化的側面から日本人を読み解くことでより分かり易く日本的空間を理解することを目的とする。つまり「間」という抽象的な概念を認識する時の、日本人の深層に通底している特性を明確にすることで、2章以降に記述される日本的空間の理解の基盤となる。また空間の特質からの逆説的な関係性を同時に示したい。

### □言語から空間へ

認知言語学は言葉=道具として、言語にも同じように人間の思惑によって表出している部分があるという姿勢の基に発達した学問である。とりわけ日本語および日本文化は西欧的な言語と比べてより主体的な営みに依存していると言え、「主語なし文」などにおける日本語の特質はその「場」に依存する高コンテクストな働きを示し、人間の認知と密接に結びついたものである。例えば日本語における「われ・かれ」などは空間のコンテクストの中にその意義が見出されるあいまいな言葉であり、そこから想起されるのは日本的な中間領域（縁側など）だろう。小林修一がいう日本人のメトニミー的認知構造は、日本の空間の特質、そしてこの論文の基礎となる概念である。

### □社会から空間へ

社会及びその周辺環境を構成する市町村や企業には日本特有の概念が多く存在する。それらは私たちを拘束するルールであり、空間構成の規範となる事物である。

李御寧は「縮み」志向である日本人の社会は「拡がり」に弱い構造を持ち、幾度となく市場を広げることを失敗してきたと史実を述べる。加えてオギュスタン・ベルクは日本社会は疑似家族的労使関係の中にあり集団指向性が浸透した社会であるとし、その空間において象徴作用（ルール）が存在することを示唆している。「間」の概念とその形式主義的な構造を踏まえ、日本人の持つ水平に面向する側面と、西欧の垂直性の強い側面を対立概念として描き、前者はあいまいな壁による空間の分節、後者は絶対的な壁の分節へと繋がっていく。

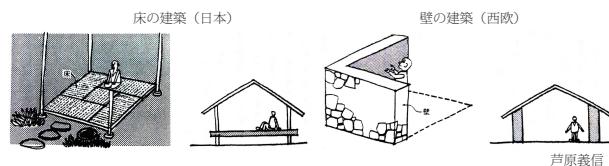
### □文化から空間へ

「借景」「枯山水」「茶室」などの日本の文化について考察を深める。文化は建築を創造する上での直接的な要素となり、日本建築の象徴的空間を担うものである。日本文化は西欧の一点に収束する遠近法とは異質であり、面向的な空間性から導き出され、内部空間の拡張といった側面から捉えることができる。例えば、ベルクは「借景」を「間」の概念と強く結びつけ、「間」は中景としてそこに存在していると述べる。更に「枯山水」のような縮景文化はメトニミー的認知構造として、そして「見立て」といったような磯崎新の見出したポストモダニズム的概念へと接続することが可能である。

## 2章. 空間への表れ

この章では1章で記述した言語学・社会学的側面などから明らかになった日本人の認知構造を基にして、建築または都市に表れる日本的な要素について考察する。1章で述べた日本人の深層に根付く心理が空間にどう表出しているのか。それらを考察する上で、日本の建築的特徴として木造による「軸組」が主流の構造であったことや、床を単位とした空間の構成法が深く関わってくる。2章では1章で述べたことを具体的な建築で証明しつつ、軸組などの建築的な文化の系譜から来る特徴と合わせて記述し、両者の相互依存的関係性を明らかにしていく。

### □ 日本的な壁認識



軸組文化である日本は西欧諸国と違う壁の認識の仕方（壁面を絶対的なものとして捉えない）をし、それが空間の造り方に表出している。また1章で述べた関係性によって見出される主体性と慣行によってできる非物質的な境界が象徴作用として空間に働きかけ、壁を希有なものとして認識すること可能にしているとも言える。

また西欧では建築をモノ（物質）として捉えるのに対し、日本は建築をコト（出来事）として見ているという視座を基にこの論を進め、コトの心理には日本人の認知構造があり、モノ（摸や障子）が生成されていったと考えることで、先に述べた背景と空間との密接な結びつきが明らかになるのである。

### □ 生成されるすき間

「日本語ではこうした人工的秩序の間を「すきま」という。「充実」や「埋め尽す」ことが西歐的だとすれば、その対極にある「すき間」は極めて日本的である。」

（横文彦 他 著『見えがくれる都市』鹿島出版会 1980年）

日本の住宅街に見られる特徴的なすき間（住宅と住宅の間にできたすき間など）には二つの意味作用が存在している。一つは先に述べた軸組文化からの系譜であり、もう一つは1章から続けて述べている壁の認識からの系譜である。日本において壁は絶対的な境界をつくることが出来なかつたために、都市は無数の「間」を隠している。つまり面と面との生じるすき間は、単純なすき間ではなく「間」に内包される自然感や社会的な約束事（象徴）によって支えられていたのである。

### □ 空間の仕切り

日本的な壁認識を記述する中で前章は外側に目を向けたが、この章では建築の内側に目を向け、室内空間の仕切り方について考察する。古来、寝殿造りを始めとする日本建築は先に述べた薄い面により水平面を仕切ってきた。極論ではあるが日本建築の歴史は一室空間をどう仕切るかにあったと言つても過言ではない。日本の家具は移動可能な仕切り装置であり、加えて畳という床に配置されたモジュールはその意識を加速させた。

また現代建築でも参照される一室空間の日本的空間の特質は、壁認識から続く水平面の分割、「間」の取り方の変遷の歴史である。スーパーフラット建築などに散見される一室空間は、空間の解体というよりも、空間にあつた象徴やルールの解体と再構成であり、「間」の系譜の延長として位置付けられるのではないだろうか。

## 3章. 多面的な視座

3章ではもう少し視点を広げ日本の「間」についての考察を行う。反復と差異の中に見出される「間」、また他国との比較としてオランダを引き合いにだし、類似性などを記述することにより理解を深める。そして現在において「間」を体現するものとは何か考察を深め、背景でも述べた問題への補助としたい。

### □ 反復と差異の日本美

反復は時として隙間を内包する。ジル・ドゥルーズは認識論的に反復を捉え、存在の同一性の中に表れる反復の不完全性（差異）を唱える。日本の列柱空間で意識されるのは柱ではなく、間（余白）の方であり、法隆寺の伽藍配置は立面のバランスをとるために左右の柱間が僅かに崩されている。つまり日本の建築が持つ反復と差異の中に「間」は存在し、主体と対象は物理的意味を越えて、「間」の持つ差異（ベルクの述べる空っぽとくい違い）によって結びつけられているのである。

### □ 日本とオランダの比較

『現実と創造』の中で川添登はギーディオンの考察を参照し、オランダの水との戦いとその利用による平坦な面との釣り合いと、日本の水田における水平面の仕切りの類似性を述べ、同時にそれらの同質性とは別にオランダ人の外界に対する防衛と日本人の外界に対する開放性というハッキリとした区別を持つと述べる。また「桂離宮」とアイクの「子供の家」の形態的類似を契機として、その背後にある水平面の内からの拡張と外からの単位の反復という認識の違いなどを浮き彫りにしていく。

## 4章. 総論

「間」は平面的な側面と空間的な認識が絡み合う複雑さ故に、具体的な記述が困難な概念である。しかし一つずつ要素を抽出し体系化することで絡み合った糸を、僅かであるが解きほぐすことができた。「間」を理解することは空間に存在する慣行や象徴を見出すことに繋がり、新しい空間の創造への原動力となるだろう。そして「間」の評価体系の確立は、建築空間へのフィードバックを容易にし、伝統の継承を自然な生態リズムの中に内包することを可能にするのだろう。

- <主要参考文献>  
\*オギュスタン・ベルク (1985)『空間の日本文化』(宮原信訳)筑摩書房  
\*オギュスタン・ベルク (1996)『都市の日本一所作から共同体へ』(宮原信・荒木亨訳)ちくま書房  
\*小林修一 (2009)『日本のコード』みず書房  
\*横文彦 他 (1980)『見えがくれる都市』鹿島出版会  
\*芦原義信 (1979)『街並みの美学』岩波書店  
\*李御寧 (1982)『「縮み」志向の日本人』学生社  
\*多木浩二 (2001)『生きられた家』岩波現代文庫  
\*磯崎新 (2003)『建築における「日本的なもの」』新潮社  
\*神代雄一郎 (1999)『間 (ま)・日本建築の意匠』SD鹿島出版会